

# 夢

芥川龍之介

青空文庫



わたしはすっかり疲れていた。肩や頸くびの凝こるのは勿論、不眠症もかなり甚しかった。のみならず偶々たまたま眠たつたと思うと、いろいろの夢を見勝ちだった。いつか誰かは「色彩のある夢は不健全な証拠だ」と話していた。が、わたしの見る夢は画家と云う職業も手伝うのか、大抵たいてい色彩のないことはなかった。わたしはある友だちと一しょにある場末ばすえのカツフエらしい硝子戸ガラスどの中へはいつて行つた。そのまた埃ほこりじみた硝子戸の外はちようど柳の新芽をふいた汽車の踏み切りになっていた。わたしは隅のテエブルに坐り、何か腕わんに入れた料理を食つた。が、食つてしまつて見ると、腕の底に残っているのは一寸すんほどの蛇へびの頭あたまだった。——そんな夢も色彩ははつきりしていた。

わたしの下宿は寒さの厳しい東京のある郊外にあつた。わたしは憂鬱ゆううつになつて来ると、下宿の裏から土手どての上にあがり、省線電車の線路を見おろしたりした。線路は油や金かな錆さびに染つた砂利じやりの上に何本も光つていた。それから向うの土手の上には何か椎しいらしい木が一本斜めに枝を伸ばしていた。それは憂鬱そのものと言つても、少しも差さし支つかえない景色だった。しかし銀座や浅草よりもわたしの心もちにぴったりしていた。「毒を以て毒を制す、」——わたしはひとり土手の上にしゃがみ、一本の煙草をふかしながら、時々そんなこ

とを考えた。たりした。

わたしにも友だちはない訣わけではなかった。それはある年の若い金持ちの息子むすこの洋画家だった。彼はわたしの元気のないのを見、旅行に出ることを勧めたりした。「金の工面くめんなどはどうにでもなる。」——それも親切に言ってくれたりした。が、たとい旅行に行つてもわたしの憂鬱なほの癒なおらないことはわたし自身誰よりも知り悉つくしていた。現にわたしは三四年前にもやはりこう云う憂鬱なほに陥り、一時でも気を紛まぎらせるためにはるばる長崎ながさきに旅行することにした。けれども長崎へ行つて見ると、どの宿もわたしには気に入らなかつた。のみならずやつと落ちついた宿も夜は大きい火取虫あけくが何匹もひらひら舞いこんだりした。わたしはさんざん苦しんだ揚句あげく、まだ一週間とたたないうちにもう一度東京へ帰ることにした。……

ある霜柱の残っている午後、わたしは為替かわせをとりに行つた帰りにふと制作慾を感じ出した。それは金のはいつたためにモデルを使うことの出来るのも原因になつていたのに違ひなかつた。しかしまだそのほかに何か発作的ほっさてきに制作慾の高まり出したのも確かだった。わたしは下宿へ帰らずにとりあえずMと云う家へ出かけ、十号ぐらいの人物を仕上げるためにモデルを一人雇うことにした。こう云う決心は憂鬱の中にも久しぶりにわたしを元氣

にした。「この画さえ仕上げれば死んでも善い。」——そんな気も実際したものだつた。

Mと云う家からよこしたモデルは顔は余り綺麗きれいではなかつた。が、体は——殊に胸は立派つぱだつたのに違いなかつた。それからオオル・バックにした髪の毛も房ふさしていたのに違いなかつた。わたしはこのモデルにも満足し、彼女を籐椅子とういすの上へ坐らせて見た後、早速さつそく仕事にとりかかることにした。裸になつた彼女は花束の代りに英字新聞のしごいたのを持ち、ちよつと両足を組み合せたまま、頸くびを傾けているポオズをしていた。しかしわたしは画架がに向うと、今更のように疲れていることを感じた。北に向いたわたしの部屋には火鉢の一つあるだけだつた。わたしは勿論この火鉢に縁の焦こげるほど炭火を起した。が、部屋はまだ十分に暖らなかつた。彼女は籐椅子に腰かけたなり、時々両りょうもも腿の筋肉を反射的に震わせるようにした。わたしはブラツシュを動かしながら、その度に一々苛立いらだたしさを感じた。それは彼女に対するよりもストオヴ一つ買うことの出来ないわたし自身に對する苛立いらだたしさだつた。同時にまたこう云うことにも神経を使わずにはいられないわたし自身に對する苛立いらだたしさだつた。

「君の家はどこ？」

「あたしの家？　あたしの家は谷中三崎町。」

「君一人で住んでいるの？」

「いいえ、お友だちと二人で借りているんです。」

わたしはこんな話をしながら、静物せいぶつを描いた古カンヴァスの上へ徐ろおもむに色を加えて行つた。彼女は頸くびを傾けたまま、全然表情らしいものを示したことはなかった。のみならず彼女の言葉は勿論、彼女の声もまた一本調子だった。それはわたしには持つて生まれた彼女の気質としか思われなかった。わたしはそこに気安さを感じ、時々彼女を時間外にもポーズをつづけて貰つたりした。けれども何かの拍子ひょうしには目さえ動かさない彼女の姿にある妙な圧迫を感じることもない訣わけではなかった。

わたしの制作は捗はかどらなかつた。わたしは一日の仕事を終ると、大抵たいていは絨氈じゅうたんの上のところがり、頸すじや頭を揉もんで見たり、ぼんやり部屋の中を眺めたりしていた。わたしの部屋には画架のほかに籐椅子の一脚あるだけだった。籐椅子は空氣の湿度しつどの加減か、時々誰も坐らないのに籐とうのきしむ音をさせることもあった。わたしはこう云う時には無気味になり、早速どこかへ散歩へ出ることにしていた。しかし散歩に出ると云つても、下宿の裏の土手伝いに寺の多い田舎町いなかまちへ出るだけだった。

けれどもわたしは休みなしに毎日画架に向つていた。モデルもまた毎日通かよつて来ていた。

そのうちにわたしは彼女の体に前よりも圧迫を感じ出した。それにはまた彼女の健康に対する羨うらやましさもあつたのに違いなかつた。彼女は不相あいかわらず変無表情にじつと部屋の隅へ目をやつたなり、薄赤い絨じゆうたん氈の上に横わつていた。「この女は人間よりも動物に似ている。」

——わたしは画架にブラツシユをやりながら、時々そんなことを考えたりした。

ある生なま暖あたたかい風の立つた午後、わたしはやはり画架に向かい、せっせとブラツシユを動かしていた。モデルはきようはいつもよりは一層むつりしているらしかつた。わたしはいよいよ彼女の体に野蛮やばんな力を感じ出した。のみならず彼女の腋わきの下や何かにある勻においも感じ出した。その勻はちよつと黒色人種こくしよくじんしゆの皮膚ひふの臭気しゆうきに近いものだった。

「君はどこで生まれたの？」

「群馬県××町」

「××町？ 機織はたおり場の多い町だつたね。」

「ええ。」

「君は機はたを織らなかつたの？」

「子供の時に織つたことがあります。」

わたしはこう云う話の中にいつか彼女の乳首ちちくびの大きくなり出したのに気づいていた。

それはちょうどキャベツの芽のほぐれかかったのに近いものだった。わたしは勿論ふだんのように一心にブラツシユを動かしつづけた。が、彼女の乳首に——そのまた気味の悪い美しさに妙にこだわらずにはいられなかった。

その晩も風はやまなかつた。わたしはふと目をさまし、下宿の便所へ行こうとした。しかし意識がはつきりして見ると、障子だけはあけたものの、ずっとわたしの部屋の中を歩きまわっていたらしかった。わたしは思わず足をとめたまま、ぼんやりわたしの部屋の中に、——殊にわたしの足もとにある、薄赤い絨氈じゅうたんに目を落した。それから素足の指先にそつと絨氈を撫なでまわした。絨氈の与える触覚は存外毛皮に近いものだった。「この絨氈の裏は何色だったかしら？」——そんなこともわたしには気がかりだった。が、裏をまくつて見ることは妙にわたしには恐しかった。わたしは便所へ行った後、そうそう床へはいることにした。

わたしは翌日の仕事をすまずと、いつもよりも一層がっかりした。と云つてわたしの部屋にすることは反つてわたしには落ち着かなかつた。そこでやはり下宿の裏の土手の上へ出ることにした。あたりはもう暮れかかっていた。が、立ち木や電柱は光の乏しいのにも関かかわらず、不思議にもはつきり浮き上つていた。わたしは土手伝いに歩きながら、おお声に



叫びたい誘惑を感じた。しかし勿論そんな誘惑は抑えなければならぬのに違いなかった。わたしはちやうど頭だけ歩いてるように感じながら、土手伝いにある見すばらしい田舎町へ下りて行つた。

この田舎町は不相変人通りもほとんど見えなかった。しかし路ばたのある電柱に朝鮮牛が一匹繫いであつた。朝鮮牛は頸をさしのべたまま、妙に女性的にうるんだ目にじつとわたしを見守つていた。それは何かわたしの来るのを待つてゐるらしい表情だつた。わたしはこう云う朝鮮牛の表情に穩かに戦を挑んでゐるのを感じた。「あいつは屠殺者に向う時もある云う目をするのに違ひない。」——そんな気もわたしを不安にした。わたしはだんだん憂鬱になり、とうとうそこを通り過ぎずにある横町へ曲つて行つた。

それから二三日たつたある午後、わたしはまた画架に向いながら、一生懸命にブラツシユを使つていた。薄赤い絨氈の上に横たわつたモデルはやはり眉毛さえ動かさなかつた。わたしはかれこれ半月の間、このモデルを前にしたまま、捗どらない制作をつづけていた。が、わたしたちの心もちは少しも互に打ち解けなかつた。いや、むしろわたし自身には彼女の威圧を受けている感じの次第に強まるばかりだつた。彼女は休憩時間にもシユミイズ一枚着たことはなかつた。のみならずわたしの言葉にももの憂い返事をするだ

けだった。しかしきようはどうしたのか、わたしに背中を向けたまま、（わたしはふと彼女の右の肩に黒子ほくろのあることを発見した。）絨氈の上に足を伸ばし、こうわたしに話しかけた。

「先生、この下宿へはいる路には細い石が何本も敷いてあるでしょう？」

「うん。……」

「あれは朧衣塚えなづかですね。」

「朧衣塚？」

「ええ、朧衣えなを埋めた標しるしに立てる石ですね。」

「どうして？」

「ちゃんと字のあるのも見えますもの。」

彼女は肩越しにわたしを眺め、ちらりと冷笑に近い表情を示した。

「誰でも朧衣をかぶって生まれて来るんですね？」

「つまらないことを言っている。」

「だって朧衣をかぶって生まれて来ると思うと、……」

「?……」

「犬の子のような気もしますものね。」

わたしはまた彼女を前に進まないブラツシユを動かし出した。進まない？——しかしそれは必ずしも気乗りのしないと云う訣わけではなかった。わたしはいつも彼女の中に何か荒あらしい表現を求めているものを感じていた。が、この何かを表現することはわたしの力量には及ばなかった。のみならず表現することを避けたい気もちも動いていた。それはあるいは油画の具やブラツシユを使って表現することを避けたい気もちかも知れなかった。では何を使うかと言えば、——わたしはブラツシユを動かしながら、時々どこかの博物館にあつた石棒や石剣を思い出したりした。

彼女の帰つてしまつた後、わたしは薄暗い電燈の下に大きいゴオガンの画集をひろげ、一枚ずつタイテイの画を眺めて行つた。そのうちにふと気づいて見ると、いつか何度も口のうちに「かくあるべしと思ひしが」と云う文語体の言葉を繰り返していた。なぜそんな言葉を繰り返していたかは勿論わたしにはわからなかつた。しかしわたしは無気味になり、女中に床をとらせた上、眠り薬を嚙のんで眠ることにした。

わたしの目を醒さましたのはかれこれ十時に近い頃だつた。わたしはゆうべ暖かつたせい、絨氈の上へのり出していた。が、それよりも気になつたのは目の醒める前に見た夢だ

った。わたしはこの部屋のまん中に立ち、片手に彼女を絞め殺そうとしていた。(しかもその夢であることははっきりわたし自身にもわかっていた。)彼女はやや顔を仰向け、やはり何の表情もなしにだんだん目をつぶって行つた。同時にまた彼女の乳房ちゆうぶせはまるまると綺麗きれいにふくらんで行つた。それはかすかに静脈を浮かせた、薄光りのしている乳房だつた。わたしは彼女を絞め殺すことに何のこだわりも感じなかつた。いや、むしろ当然のことを仕遂げる快さに近いものを感じていた。彼女はとうとう目をつぶつたまま、いかにも静かに死んだらしかつた。——こう云う夢から醒めたわたしは顔を洗つて来た後、濃い茶を二三杯飲み干したりした。けれどもわたしの心もちは一層憂鬱になるばかりだつた。わたしはわたしの心の底にも彼女を殺したいと思つたことはなかつた。しかしわたしの意識の外には、——わたしは巻煙草まきたばこをふかしながら、妙にわくわくする心もちを抑え、モデルの来るのを待ち暮らした。けれども彼女は一時になつても、わたしの部屋を尋ねなかつた。この彼女を待つている間はわたしにはかなり苦しかった。わたしは一そ彼女を待たずに散歩に出ようかと思つたりした。が、散歩に出ることはそれ自身わたしには怖しかった。わたしの部屋の障子の外へ出る、——そんな何でもないことさえわたしの神経には堪えられなかつた。

日の暮はだんだん迫り出した。わたしは部屋の中を歩みまわり、来るはずのないモデルを待ち暮らした。そのうちにわたしの思い出したのは十二三年前の出来事だった。わたしは——まだ子供だったわたしはやはりこう言う日の暮に線せんこう 香花火かっけに火をつけていた。それは勿論東京ではない。わたしの父母の住んでいた田舎いなかの家の縁えんさき先だった。すると誰かおお声に「おい、しつかりしろ」と言うものがあつた。のみならず肩を揺すぶるものもあつた。わたしは勿論縁先に腰をおろしているつもりだった。が、ぼんやり気がついて見ると、いつか家の後ろうしにある葱ねぎ 畠はたけの前にしゃがんだまま、せつせと葱に火をつけていたのみならずわたしのマツチの箱もいつかあらまし空からになつていた。——わたしは巻煙草をふかしながら、わたしの生活にはわたし自身の少しも知らない時間のあることを考えない訣わけには行かなかつた。こう言う考えはわたしには不安よりもむしろ無気味だった。わたしはゆうべ夢の中に片手に彼女を絞め殺した。けれども夢の中でなかつたとしたら、……  
 モデルは次の日もやって来なかつた。わたしはどうとうMと云う家へ行き、彼女の安否あんぴを尋ねることにした。しかしMの主人もまた彼女のことには知らなかつた。わたしはいよいよ不安になり、彼女の宿所を教えて貰つた。彼女は彼女自身の言葉によればやなかさんさきちよ 谷中三崎町うちやなかさんさきちよにほんごうひがしかたまちいるはずだつた。が、Mの主人の言葉によれば本郷東片町ほんごうひがしかたまちにほんごうひがしかたまちいるはずだつた。

わたしは電燈のともりかかった頃に本郷東片町の彼女の宿へ辿り着いた。それはある横町にある、薄赤いペンキ塗りの西洋洗濯屋だった。硝子戸ガラスビドを立てた洗濯屋の店にはシャツ一枚になった職人が二人せつせとアイロンを動かしていた。わたしは格別急がずに店先の硝子戸をあけようとした。が、いつか硝子戸にわたしの頭をぶつけていた。この音には勿論職人たちをはじめ、わたし自身も驚かずにはいられなかった。

わたしは怯おず怯おず店の中にはいり、職人たちの一人に声をかけた。

「……………さんと云う人はいるでしょうか？」

「……………さんはおとといから帰って来ません。」

この言葉はわたしを不安にした。が、それ以上尋ねることはやはりわたしには考えものだった。わたしは何かあった場合に彼等に疑いをかけられない用心をする気もちも持ち合せていた。

「あの人は時々うちをあけると、一週間も帰って来ないんですから。」

顔色の悪い職人の一人はアイロンの手を休めずにこう云う言葉も加えたりした。わたしは彼の言葉の中にはつきり軽蔑に近いものを感じ、わたし自身に腹を立てながら、そうそう々々この店を後ろうしにした。しかしそれはまだ善かった。わたしは割にしもた家の多い東片町の

往來を歩いているうちにふといつか夢の中にこんなことに出合ったのを思い出した。ペンキ塗りの西洋洗濯屋も、顔色の悪い職人も、火を透すかしたアイロンも——いや、彼女を尋ねて行ったことも確かにわたしには何箇月か前の（あるいはまた何年か前の）夢の中に見たのと変らなかつた。のみならずわたしはその夢の中でもやはり洗濯屋を後ろにした後、こう云う寂しい往來をたつた一人歩いていたらしかった。それから、——それから先の夢の記憶は少しもわたしには残っていないなかつた。けれども今何か起れば、それもたちまちその夢の中の出来事になり兼ねない心もちもした。……

（昭和二年）





## 青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j:utyama

校正：もりみつじゅんじ

1999年3月1日公開

2004年3月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 夢

芥川龍之介

2020年 7月17日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>